

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10980

研究課題名（和文）スポーツの文化的意義を学ぶ体育理論の授業モデル - 民俗フットボールを教材として -

研究課題名（英文）Lesson Model Aimed at Learning about the Cultural Significance of Sports through Physical Education Theory: Folk Football as Instructional Material

研究代表者

吉田 文久 (Yoshida, Norihisa)

日本福祉大学・スポーツ科学部・教授

研究者番号：30191571

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中学校・高校の「スポーツの文化的意義」に関する単元の学習教材として民俗フットボールを位置づけ、その授業を構想し、授業モデルを提案することを目的とした。諸事情により高校の授業モデルの提案にまでには至らなかったが、中学校の教師及び体育科教育学研究者との協同作業により、生徒の学習カードに基づく学習効果の分析、教師の教授行動の分析によって構想した授業の成果を検証し、予定した授業モデルの提示に至った。また、民俗フットボール研究の成果の教育還元に向けた可能性の探求として民俗フットボールの教材的価値についても言及した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、まず体育科教育学分野において、学校体育の学習領域の中で実践の蓄積が不十分とされる「体育理論」領域の授業づくり（構想・実践・検証）にモデルケースを提示できた。また、スポーツ人類学の研究成果の教育還元という学会をあげての課題に対して、民俗フットボールという伝統スポーツの教材化・教材的価値の検討を加えることができた。そして、民俗フットボールという伝統スポーツをもとに近代スポーツを批判的に捉える視点を得ることによってスポーツの価値や意義（ここでは、文化的意義）について、生徒のみならず、国民に考える機会を提供するという社会的還元の可能性も見出せた。

研究成果の概要（英文）：The present study incorporated folk football as instructional material for the unit on the cultural significance of sports in middle and high school physical education (PE) classes, designed lessons on the subject, and proposed a lesson model. However, owing to various circumstances, the development of a lesson model for high school curriculum could not be completed. Nevertheless, through collaborative efforts with middle school teachers and researchers specializing in PE pedagogy, the outcomes of the proposed lessons were evaluated by analyzing student learning effect based on student worksheets and teacher's instructional behavior. This led to the development of the planned lesson model. Furthermore, the educational value of using folk football as instructional material was also discussed to explore the potential of applying the findings from folk football research in education.

研究分野：スポーツ人類学

キーワード：体育理論 民俗フットボール 教育還元 教材的価値 文化的意義 授業モデル

1. 研究開始当初の背景

これまで申請者は英国に残存する民俗フットボールの地を訪れ、ゲームを観戦し、映像やレポートにして記録してきた。そして、現地に残る記録・文献等の資料を探り、加えて地元住民(運営者、プレイヤー、観客など)へのインタビュー、アンケートなどを実施することによって、それらのゲームをできる限り正確に記録してきた。そして、存続する民俗フットボールの特徴を整理した上で、かつて英国各地でプレイされたゲームの様相やその歴史的意義にも遡及し、民俗フットボールの衰退・消滅、変容について考察してきた。その成果をこれまで著書、論文にして発表している。申請者は民俗フットボール研究をまずスポーツ人類学研究として位置づけ取り組んだ。しかしその研究は、わが国においてスポーツを文化として、また国民的教養として根付かせるために、特に学校体育の役割に着目し、民俗フットボールを教材とするスポーツ学習を構想し、提案することを視野に入れたものであった。そのような意図で民俗フットボール研究に着手する中、2008年中学校、2009年高校の学習指導要領において「体育理論」が中学校・高校の6年間を見通した必修領域として設定された。その単元の中に、中学3年生に「文化としてのスポーツの意義」、高校1年生には「スポーツの歴史、文化的特性」が配置されたことを、申請者は体育理論の授業づくり研究の重要性とともに、民俗フットボールの教材的価値を検討する意義として受け止めた。その体育理論への要請について、菊(2016)は「これからの体育学習はグローバルな社会に対応するグローバル文化としてのスポーツの意味や価値を深く理解する必要性」(体育科教育、第64巻第10号 pp.12-15)があるとし、実技授業からは独立した座学による理論学習が不可欠であるとする。そして2017年中学校、2018年高校の学習指導要領ではスポーツの社会とのつながりや文化としての特徴を学ぶ体育学習がより強調されると述べている。体育理論は、「雨降り体育」と言われるほどに授業の位置づけが曖昧で、体育の授業づくり研究の対象としてほとんど扱われることはなかった。そして当然、実践の蓄積も少なく、交流もほとんどされていない。唯一、佐藤・友添(2011)による『楽しい体育理論の授業をつくらう』(大修館書店)が参考文献として示されているのみであり、現場の体育教師の魅力ある授業づくりに役立つ研究や授業モデルの提示が求められている。

そこで本研究は、民俗フットボールをサッカー、ラグビーの起源としながらも、その伝統の維持と存続のための住民の苦労と努力の歴史をもとにスポーツの文化的意義を学習する授業モデルを提案するものであり、今後の体育理論の授業づくり研究に大いに貢献すると考える。それは、日本体育学会(現日本体育・スポーツ・健康学会)の「スポーツ人類学」、「体育史」分野が直面する研究成果の「教育還元」という課題に応え、さらに、人文科学研究の成果を社会に還元するひとつの在り方を示すことにもつながる。

2. 研究の目的

本研究は、中学校及び高校の体育理論に設定された「スポーツの文化的意義」に関する単元の学習の教材として民俗フットボールを位置づけ、その授業を構想し、実践モデルを提案することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、以下の内容を重層的に取り組むことを計画した。これまで収集してきた民俗フットボールに関する情報について、教材化の視点から不十分であること、疑問とされたことを現地に赴いて確認する。一方で、現場の体育教師による体育理論の授業の取り組みを調査し、それを授業の構想に生かす。ゲームの継承者である地元住民にアンケートを実施し、スポーツの担い手の視点からそれを整理する。カークウォール(スコットランド)では約20年前にアンケート実施しており、その経験を生かし、当時のアンケート手法を頼りに住民の意識変化も考察する。民俗フットボールを教材とする中学校・高校の「スポーツの文化的意義」に関する単元の授業を構想する。その構想に基づいて実験的授業を行い、それを分析・検証し、授業モデルを提案する。

以上のことを当初予定していたが、教師の異動等の諸事情により高校での実践ができず、中学校での体育理論の「文化的意義を学ぶ」単元の学習に焦点化し、研究の趣旨に賛同してくれた複数の中学校教師による実験的実践を行うことになった。また、予想もしないコロナ禍により、構想した授業展開が制約を受け、学校に向いての記録・観察を思うように実施できず、研究期間の延長を申請することとした。カークウォールへの訪英調査も、2018年には訪問し、授業に有用な情報を得ることはできたが、その後コロナ感染による規制により、予定していたアンケートの実施には至らなかった。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の5点にまとめられる。

- (1) 体育理論の学校現場における実践状況の把握

体育理論の授業の実施状況は、本務校及び非常勤先の体育専攻学生にアンケートを実施し、体育理論の必修化の実施以降、10年経ってもそれが十分に浸透していないこと、一方で学生たちが有意義と受け止める授業が少ないながらも実践されていることが確認できた。また現場の教師の面談から、同じ学校の中でも体育科の教師の意識の差が大きく、未だに雨降り体育として体育理論が実施され、また体育理論の授業に関心を示さない教師も少なくないことが確認できた。

大がかりな調査を実施するまでには至らなかったが、身近なところで現状を把握することも体育理論の実施状況を知ることができ、特に、「スポーツの文化的意義」に関わる内容については、大学生からは学んだ記憶がほとんどないとの回答を得、その実践の不十分さが浮かび上がった。

なお、研究に取り組む中で、現在までの体育理論研究・実践の動向を整理しておく必要性を受け止め、研究期間の最終年（2023年度）に総説論文としてまとめ、学会誌に投稿した（2024年6月掲載予定）。

(2) 英国への調査による有用な情報・資料の収集

教材とする民俗フットボールとしてカークウォールのゲームに一本化し、その教材研究の作業は、2018年9月に現地を訪問し、これまでゲームの存続の担い手として功績を残してきた数名の人物にインタビューを実施し、貴重な情報を得ることができた。特に、地元住民の民俗フットボールを存続させてきた苦労や工夫、住民たちの強い伝統継承の意識について、ゲームを担う中心的人物の範囲であるが、確認することができたことは、スポーツの文化的意義を学ぶ授業を構想する上で、有益であると受け止めた。

その後、それを生かして授業を構想したが、諸事情により、申請者が大学において担当する教職科目「保健体育科教育法」の「体育理論」のなかで学生を対象に実施し、学生にも授業づくりに取り組ませることにした。そこではカークウォールでのインタビュー等を生かし、これまで撮影した写真等でゲームのイメージを待たせようとしたが、それでも学生にはカークウォールのゲームの姿や内容の理解が難しいという声が出され、これまで収集してきたものでは不十分あること、さらに、中学校での実践の議論においても、カークウォールのゲームの教材化のためにゲームのビジュアルによるよりの確な材料の収集の必要性が生じた。

そこで、再度調査に出かけることを考えたが、コロナ禍によって、渡英することができなくなり、2024年2月ようやくカークウォールに出かけることができた。ただ、限られた日程の訪英であったため、今後住民へのアンケートを実施することの了解を得ることにとどまったが、これまでの研究成果を英訳した資料を提供し、申請者の研究に対する理解を得ることができ、加えて、カークウォールの住民構成や環境の変化により、住民のゲームに対する意識も変化してきていることを知り、コロナ禍の中、そしてその後のゲームに関する状況変化について改めて確認する必要性も見出された。

(3) 民俗フットボールの人類学研究の取り組みと成果の発信

本研究に取り組む一方で、申請者は2018年には博士課程に入学し、博士論文の作成・提出の作業を同時並行で行うこととなった。それは、25年近く取り組み蓄積した英国に存続する民俗フットボール研究成果をまとめることを意図したもので、特に、人類学プロパーの視点から申請者の研究成果を捉え直すことを目的としていた。しかしこの作業は、民俗フットボールの教材的可能性を見出すための、伝統スポーツの文化的・社会的価値の確認し、それらを教育に還元することを視野に入れており、スポーツ人類学の研究成果の教育還元に向けて、示唆を与えるものであった。この取り組みは本研究に十分生かされることとなり、その成果は2020年の『年報人類学研究』への論文掲載、そして、2022年の著書（単著）の刊行に至っている。またこれらは、構想した授業の実践者に民俗フットボール、そしてカークウォールのゲームの理解を深めるテキスト的役割も果たすこととなった。

(4) 中学校での授業実践による成果（1年生から3年生までの授業構想から実施、検証まで）

研究開始から、体育科教育学の研究者の協力を得ながら、授業構想に取り組んだ。そこでの検討によって、「文化としてのスポーツの意義」の単元の授業だけではなく、民俗フットボールを教材として各学年に位置づけようという考えに至り、3つの授業構想の作業を行った。また、民俗フットボールについて現場の教師に理解をしてもらうにはかなりの時間を要することがわかり、2018年から2019年にかけてかなり回数ミーティングを実施して構想した授業の実践化に取り組んだ。なお、中学校での授業者は確保できたが、高校での実践は、当初予定をしていた授業者が転勤することになったという事情もあり、それに代わる授業者を得ることができず、当初計画していた高校での民俗フットボールを教材にした授業の実施、モデル化については断念した。

2020年度は予想もしなかったコロナ禍の影響によって、現場での授業ができない状況が続き、学校の事情を優先せざるを得ず、実践を承諾してくれた授業者が中学2年生の担当になったこともあり、3年生に設定されている「文化としてのスポーツの意義」の単元

につなげる実践として、「運動やスポーツが心や社会性にあたえる効果」(2年生)の単元の授業を位置づけ実施した。生徒の学習ノートを分析することで、ルールのない民俗フットボールがゲームとして成立していること知ることを通して、スポーツにおけるフェアプレー、スポーツマンシップの精神の在り方を考え、交流できたという学習効果を確認することで、一方、授業者からも、民俗フットボールの存在を知ったことが学びを深めたという手応えが示された。その成果を2021年の日本スポーツ人類学会において口頭発表を行い、その後論文化し学会誌に掲載されることになっている(2025年3月)。またそのなかでは、日本スポーツ人類学会が研究課題として掲げる「研究成果の学校教育への教育還元」という課題に対する「体育理論」の授業の先行的実践の試みとしてだけでなく、「民俗フットボール」の教材的可能性の検討及びスポーツ人類学研究成果を体育理論の授業に還元するための手続きについても提案している。

中学校3年生の「文化としてのスポーツの意義」単元の授業については、2年生の「社会性」の実践の検討と同時並行的に実践化の作業を進め、また、中学1年生の「スポーツの必要性和楽しさ」の単元の実践を実施し、1年生から3年生までの各段階において、民俗フットボールを教材として位置付けた系統的な実践を構想し、実施した。さらに、「スポーツの文化的意義」の実践を1時間では十分な学習に至らないと考え、2時間実施し、授業にグループ学習、調べ学習を導入した2時間構の授業を構想し、実験的に取り組むことも行った。そして、当初実施不可能であった高校の実践において、協力者が得られたことから、試行的ながらスポーツの文化的意義に関わる実践にも取り組むことができた。

なお、中学3年生に実施したスポーツの文化的意義の単元の実践では、生徒の学習カードの記述を質的、量的の両面から分析し、学習の成果が示すことができ、また、授業者へのインタビューによっても民俗フットボールの教材的価値を確認することができた。なお、その取り組みは、2024年のスポーツ人類学会で発表した。

(5) 本研究の取り組みの広がり

構想した授業の実践化の協議や授業の実施者として協力してもらった授業者に「体育科教育」誌(大修館書店)に本研究で取り組んだ実践報告を投稿してもらった。また、地域の保健体育科の教師を対象とする研修に本研究の授業実践者(3名)が講師となり、本研究で行った体育理論の3つ実践を発表する機会を得ることができた。そこに参加した教師から自分たちも実践したいとの声をもらうなど、これまで取り組んできた研究成果を発信することで、なかなか進展しない体育理論の実践の蓄積に向けて啓蒙的作業を展開するところまでに至ったことは、申請者の研究の目的を超えた協同的取り組みの成果となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 吉田文久	4. 巻 884
2. 論文標題 スポーツからみた英国スコットランド	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青淵	6. 最初と最後の頁 14-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田 文久	4. 巻 -
2. 論文標題 英国における民俗フットボールの人類学的研究 - その変容の社会的背景と存続の現代的意義 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南山大学機関リポジトリ（学位論文：人間文化研究科）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15119/00002918	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田文久	4. 巻 69
2. 論文標題 そろそろ「体育理論」を「レギュラー番組」に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 9-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田文久	4. 巻 第10号
2. 論文標題 カークウォールのBa'ゲームにみる民俗フットボールの意味の変容 - 伝統行事からコミュニティの統合の契機へ -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報人類学研究	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大貫耕一、吉田文久、森敏生	4. 巻 第67巻第3号
2. 論文標題 座談会 「連載 スポーツの授業について」のまとめにかえて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 58-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 吉田文久
2. 発表標題 スポーツ人類学研究の「体育理論」への教育還元を試み - 民俗フットボールの教材的可能性を探る実践の取り組み-
3. 学会等名 日本スポーツ人類学会第23回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田雄樹、吉田文久
2. 発表標題 スポーツ人類学研究の「体育理論」への教育還元を試み - 民俗フットボールの教材的可能性を探る実践の取り組み(その2) -
3. 学会等名 日本スポーツ人類学会第23回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 吉田文久	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 336
3. 書名 ノー・ルール - 英国における民俗フットボールの歴史と文化 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------